

短歌結社なんたる星

はだし

米田 一央

スコラブ

恋をしている

迂回

加賀田 優子

ナイス害

Guest

山中千瀬

2016. 3

【目次】

連作

「花図鑑（抜粋）2」・・・・・・・・山中千瀬

「ナダルリバースエボリューション」・・・・・・・・ナイス害

「どうしてあんなドアの色なんだろう」・・・・・・・・加賀田優子

「ミナトアラウンド」・・・・・・・・スコラブ

「だめなやつと雪」・・・・・・・・はだし

「コードネームおでかけ日和」・・・・・・・・迂回

色々

「猫」・・・・・・・・加賀田優子

「写真を撮った話」・・・・・・・・はだし

ラブラブ山中千瀬さん超愛しているという気持ちを込めた一連

編集後記

花図鑑(抜粋)2

山中千瀬

花図鑑より……ヘビイチゴ、カスミソウ、コモンタイム、ハナミズキ、キンモクセイ、ハクチョウゲ、ワスレグサ、サクラソウ、ギンモクセイ、フユガラシ、ハナミズキ、ジギタリス、カラスウリ、トケイソウ、ダンデライオン

変奏をびみように重ねいちどきりちぎった手紙の語句はひかった

感動のスパイ映画を見るほくら育った町を嘘に変えても

後悔も問題じゃない たくさんの犬を従え向かう浜辺へ

はなしたらないみたいでしょう身にすこしずつおいてゆくきのがあつて

近景に燃える花束 くれよつて背中に言つて、言つてみただけ。

はつなつの口笛で黄の蝶を呼ぶ海の青さの現実離れ

わー、みんなすばらしい幽霊となり群舞のなかにさよならなんだ

探し出してくれよあなたは楽園にそんなかおしてうそばっかりで

吟行に萌える花々 暮れる日々 背中合わせのいのりの日々だ

風船の揺れる尾を7月のそのラッキーセブンの視線で追いな

反省はなしだ。みずから水際にずらり並べた騎士だったから

ジグザグに銀河を指した。たましいが理由になればすぐにでも 行く

かもめたち落下に似せて水面へ海へと落ちる(りりと落ちゆく)

飛んでそして決して落ちない いったいの想像力は失われない

弾丸はでも届こうよ楽勝のいくさのように音楽が来る

パン屋さんのポイントカードが落ちていてそれが遠い国のものだった
多目的トイレは妙に暖かく土下座するには最適である

現行犯逮捕されてるハンバーグ愚かだねほらタレまみれだし

言葉のジャングルジムで足滑らせて重症 無保険 見舞い客ゼロ

ここで先の四首の短歌をナダルリバースエポリューションしてもらいました。

ナダルリバースエポリューションとは、お笑いコンビ「コロコロチキチキペッパーズ」のナダルの特技。

単語を言われると進化した単語を良い声で返すことができる。

例：「えんぴつ」→「シャーペン」

農協のJAカードが落ちていてそれが田村ゆかりファンのものだった

東京流通センターは妙に暖かく寄稿依頼するには最適である

現行犯逮捕されてる井戸田潤愚かだねほらタレまみれだし

言葉の「S」で足滑らせて死亡 無保険 見舞客のジエロ

どうしてあんなドアの色なんだろう

加賀田優子

レンジでチンされていたいなまだ花のひらかないぬるい真夜中のころ
もうすぐで予約録画の時間だね食べたいものずっと決まらないね

プリクラに満開の枝ごと持ちこめばひとつ笑うたびひとつ崩れる

夢の話をした私もわるいけどあなたはドアに小指を挟め

ゲームセンターで迷子は終わらないような気がして行かなくなった

しあわせがどうか言ったあとの頬ばんと張り牛井屋を目指した

竹串の刺さった鳩がとことことととことととことととことととことと

ばんそうこう可愛くしたひとすごいなあ私あなたのことちよつと好き

限りある視界を世界と呼びながら酔ってるだけのヨコハマミナト

市を出れば異国と思う 黒髪の外国人に囲まれながら

「いまここにお酢と醤油があるじゃろう？」餃子だろろうが最後まで聞く

横浜をYOKOHAMAという文字で言うすこしださくてすこしたのしい

悩ましく行き交う人のことなどは素知らぬ顔で咲く観覧車

□□□の中に浮かぶ○ 心臓なのだと仮定してみる

人をダメにしちゃうソファがあると聞きダメになろうと喜んで行く

プラネットナンバーファイブに腰掛けて指のかけっこ飽きる頃まで

ふたりして明日の予定を考える港に未来の船が来ている

赤い靴揃いで履いてきみとならどこでもやっていける気がする

だめなやつと雪

はだし

洗い物したくない日はその意志に従つてるとそうせず済む

ふつう、つて何だろうな をあきらめたり なかったり オロナインむっちゃ塗る

ピーマンが心配だ、きょうは早く帰ろう

土曜日の仕事をいやがつてた人の車のライトもうあんなとこに

座椅子と向かい合つてると今年も海に行きたいなと思う 冬のほうね

恐竜がテレビの中でうごいてる 朝になつたらわすれてしまふ

よく家にいくからその弟とも仲良くなつて、だからかな、セーブに関するケンカを止められなかった

スープからスープの匂い わたしからわたしの匂い スープの匂い

たまつてて日本がへんになつたかと思つてたら走り出す車たち

コンポタが雪へはんぶん埋まつてる ひっぱりだす あったかいのかよ

パーカーのくせにうれしいことを言う パーカーで来てくれてよかった

コードネームおでかけ日和 迂回

大抵の天気似合う万能が欠点だよねでんぐり返り

なんとなく不利だと思ふタバコ屋が改装しててなんとなく不利

新鮮な朝獲れ野菜がやや濡れているのは朝と関係がない

あの家の洗濯物は干したタオルなのかもしれない虫歯がうずく

挫折した春のにおいね魚屋はとつても陽だまりに敏感ね

応答せよおでかけ日和！コードネームおでかけ日和のパン屑が舞う

絶世の美女 まちがえた 慣性の法則でした駅にいたのは

シャッターの音は怯み謝っている忘れないでうぐいすは赤

電線を伝う雪融けあの家のテレビに映るねむったイルカ

足あとの残らない道うおおおお絶対ハンバーグ食う

窓をあけたら思いのほか風がつよかった。

崩れたダンボールの束が盛り塩につっこみ、あたりに塩が飛び散る。

ああ。

ああああああ。

やだやだいやだ、もーいやだ、ぜんぶやだ、と畳につっぷす、のを堪えて、椅子の上のガムテープを掴んだ。

そこに、のそ、と玄関のドアをすりぬけ、入ってきたのが猫だった。

新生活に霊はつきものだがこれには驚いた。

白っぽい猫だ。

ちょっと太り気味ではあるが、首がひん曲がっていたりしないし、どこの内臓もでていない。

ようするにぜんぜんグロいところがない。

ふさふさの尾をまっすぐにたて、ゆっくりとこちらに近づいてくる。

むちとした頬、からとびだしているヒゲが、歩くのにあわせて動いていた。

見れば見るほどむしろ、かわいい、が私の全身をかけめぐった。

かわいい。

かわいいぞ。

そうして、ぽて、むち、ふわ、と足元までやってきた猫は、しかしこちらをスルーして窓のそばの日溜まりに入った。

畳の匂いを嗅いでいる。

ちいさい鼻の先がぴくぴくとなっているのがまたかわいい。

やがて猫はそこに寝そべり、あっというまにまるくなった。

どうしてこう、無防備な動物の姿というのは、こんなにも人のところをとろかすのか。

もう猫から目を離せないまま、手の中のガムテープがぐにぐにとなる。

そこで気がついた。

猫の背中にくっついていてものがあつた。

それは花卉だった。

毛並みが白に近いので、似た色の花卉はほとんど同化していてわからなかったのだ。

気づいたとたんにそれはくっきりと見えはじめた。

呼吸にあわせてゆるく上下する背中へ。腹へ。顔へ。脚へ。尾へ。

降るようにそれは増えた。

白っぽい、という印象だった猫が、ぼんやりと桃色にかわっていく。

そして全身が覆いつくされる、という手前で、私はガムテープから手を離れた。

ふりかえり、こぼれた塩のそばに向かい、ひざまずいて手で塩を集めた。

そのまま小皿に戻し、山をつくる。

ぎゅう、と強めにかたちを整えた。

ふりかえる。

そこにはもう日溜まりだけだった。

手を伸ばして転がったガムテープを拾うと変形していた。

爪ではじまりを見つけ、軽くひっぱり、びびび、と千切って輪にする。

まだ塩の散っているあたりに押しつけると、かすかにざり、ざり、という音がした。

友人と飲み屋街を歩いていると「写真を撮ってください」にはじめて遭遇した。いきなりみせられた機械の高性能そうな佇まいに圧倒され、あっというまにその場の力関係は、集団＝私の友人＞機械＞私となった。友人がさりりと私の後ろへ身を隠す。このやろう。機械さまを手渡していただいた私めは、ただ言われた通りに押しさせていただく、に終始した。とうかさせていただくしかなかった。なんとか二枚をとり終え、私たちは集団と別れた。二枚なのはどうやら一枚目が暗かったから、らしい。最初からフラッシュたいとけ、いや、フラッシュたいいただきとうございます、が正しいか。こういうの、苦手だ。別れてから少し歩いて振り返ると、件の集団はまだあの「現場」でわやわやとした雰囲気を出させていた。

(対応、これでよかったんやろか)

私はほっぺのニキビに悩み、コンビニへゆく途中にひっくり返るわからん虫に同調（けっして同情などではない）し涙するような、いわゆるノン艶薄氷ボーイである。ぱりぱりハートなんである。しかし、だ。そういうボーイであるがゆえに、己の弱点は心得ているつもりだった。こういったところの危機についても（あれだ、これこれがこうして写真撮ってあれだとあれで、たぶん事後に後悔が来るやつだ、でも、きっと「大丈夫」だ「大丈夫」に違いない）という大丈夫ありきの精神論のごまかしテクを用意し、こころのダメージに備えていたのだ。備えてはいた。いたにはいたのだが、びっくりするほど敵は強すぎた。というか自軍が弱すぎた。写真とってください砲に、私の「大丈夫」砦はボッコボコの穴だらけ、門はがばがば。結果、めちゃくちゃ動揺してしまった。そうなってしまえばもう、これはあれだ、泥沼である。私、ないしはあなたのスーフアミのソフトを何本か飲み込んだはずの、あの泥沼である。（これをもし読んでいるなら泥沼よ、早急にロックマンX2をお返しいただきたい、待ってるから、お願い）

泥沼は私の頭からころにいたるまでをどっぷりと飲み込んでいった。身体中にさっきの（対応、これでよかったんやろか）が響く。それはリフレインとなり、なかなか続き、頭のなかの舞台に『撮り直し隊』なる小隊まで登場しだした頃には、外面は冷静を装いつつも、もはやころはわちゃわちゃであった。余談だが『撮り直し隊』はどことなく、あの5人に似ていた。サカナクションの新宝島の元ネタになったあれだ。どうでもいいけど。まあそしてだ、脳内のわちゃわちゃが最高潮に達しようとするそのとき、舞台袖からひとりの少年があらわれた。そいつは少年のくせに、わちゃわちゃやつとる隊員たちを軽々と、舞台袖へまとめて押し込んでいった。ああこれはそう、ある強い「ひらめき」だ。私はそんな気がした。ひらめきというものは、うまれた瞬間において、頭のなかでどんな記憶や想像よりも強力だとおもう。そしてわちゃ隊（略した）が完全に撤退するまでの間、ちゃんちゃか流れていた5人コント達の場面チェンジなテーマソングは、場の暗転と共にゆっくりとフェードアウトしていった。残るはまっくらで、しずまり返る舞台のみ。ややあって、舞台中央をスポットライトが照らすと、高貴な椅子に彼が座っていた。王が座るようなでかさの、いい椅子。そこにちょこんと。そして客席の「待ってました」に応えつつ、彼は語りはじめた。

「もし、もしだよ、彼らがさ、やがていつか、あったねー、とか楽しかったね、をやる、その会話の、中にだよ、あははあの人へただったな、とかみたきさ、【あの人】として残るかもしれない。ちょっと恥ずかしいけれどさ、けれども、それってね、悪くないかも、と、ぼくは、思ったんよ。思った。」

なんだろう、そのふわふわした、けれどピュアピュアルーンな主張は、飲み屋街にふっと現れるエアポケットのような、しいんとした闇の中で友人の後ろをキープし続ける私のこころや頭を、泥沼からざっぱんと引き抜いてくれた気がした。そしてしだいにそう『思う』ものなのだ、という妙な確信もうまれてきた。その感情が私をやわらかくつつんでいく。うん、そうだと『思う』よ。われ思う故にわれ肉まんなり、なんだそりゃ。まあそう思えるくらい、あたたかく、いい気持ちを手に入れた私は、今日を楽しもう、と思った。すこし先に行く友人に並ぶ。夜はこれからなのだ。

2月某日――

bar「廃船」（なんたる星が歌会などをするとき集まるbarもといチャットルーム。恋をしているがマスターを務めている。かわいい店員募集中）で、マスター恋をしているはひとりため息をついていた。

恋をしているは自分を短歌神だと思っているふしがあり、いままで作歌について悩むことがほとんどなかった（歌ができないことは多々あり）。

恋をしているが作る短歌はすべて素晴らしく、人々の頂点に君臨している為いままで悩む必要がなかったのだ。それが――

ないのだ。

全知全能神恋をしているがいままで経験したことの無い唯一の事

絵

短歌を絵にしてもらったことがない。

前号のなんたる星でその寂しさのあまり自分で「かわいいロボット」を描いてみたが、あまりの画力の無さに落ち込み（しかし嫌がらせのつもりで掲載）、あまつさえどこがかわいいのかを説明してしまったりもした。

これではいかんざき

恋をしているは「これではいかんざき」と思った

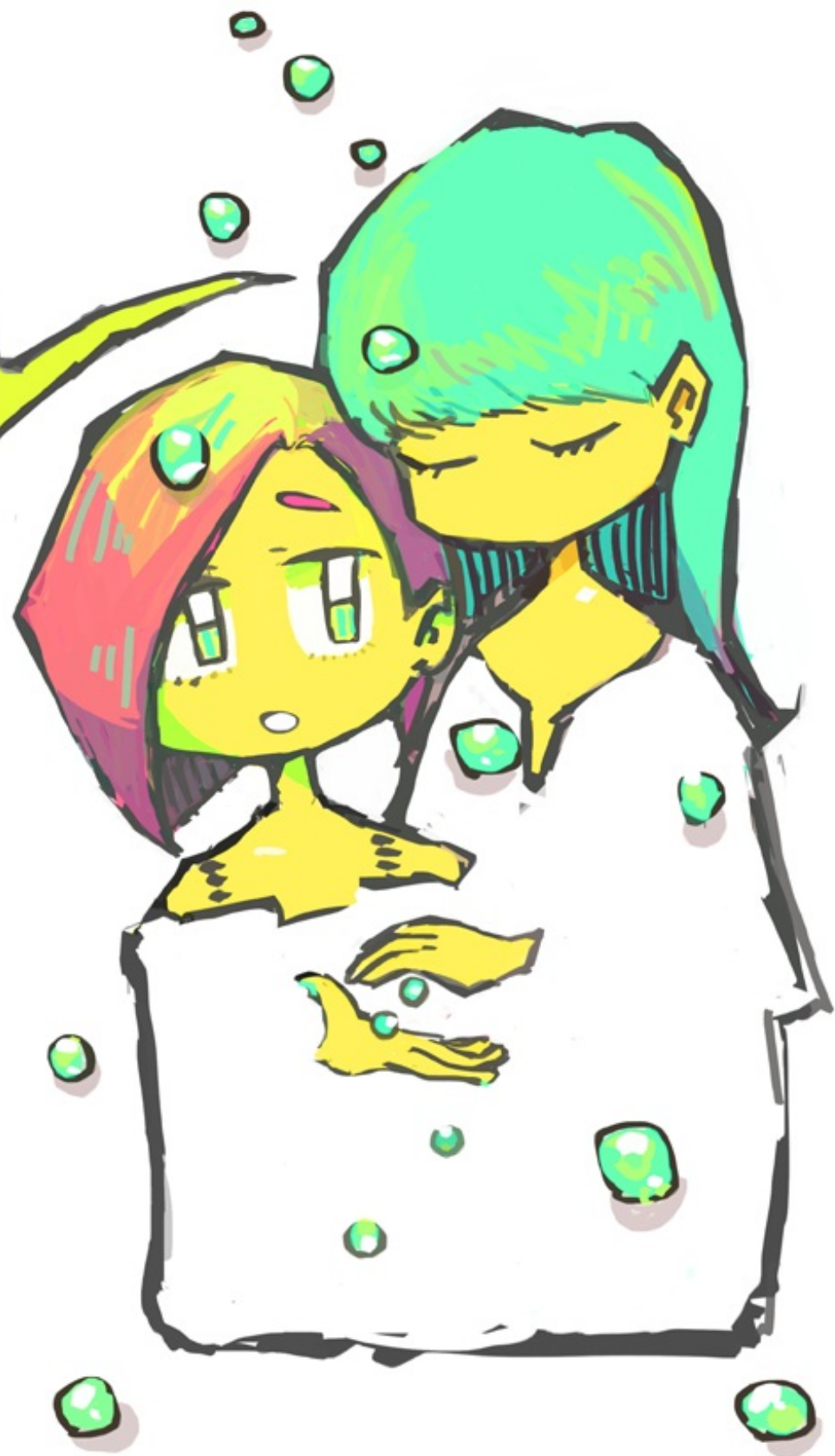
恋をしているが「これではいかんざき」と思った時、必ず誰かが助けに来てくれる。

ギイ

山中千瀬「はたらきたくない」

廃船の扉を開けて入ってきた女神は「はたらきたくない」鳥だった。

本当は飲まない方がよくなる、とへんなくすりを渡されている



そんな訳で、山中さんに僕は自作の短歌10作を山中さんに見てもらい、そのうちの1作品をイラストにしてもらいました！！僕得！！！！いいだろ！！！！！！！！！！

めっちゃかわいい。

もともとこの歌は、「本当は飲まない方がよくなるんだけどね」って言いながら薬を飲むおばさんを何人か見たことがあって「じゃあ、飲まなければいいのに」ってでもその時は全然思わないんですよ。

「分かってるんだけどね」っていうそういう時のなんかうわーって感じがあって、そのうわーの違和感をののーっと歌にしたということだったんですが（何を言っているのー？）、見事に可愛い二人のでもやっぱりちょっと危険な香りの絵にさせていただいて、うわー——んんん！！！！

ちなみに今回も恋をしているの性格の悪さがバッチリでて、「なるべく絵になりそうもない」歌をセレクトしたので、山中さんは非常に選ぶのも描くのも大変だったと思います。

そんな山中さんの選歌理由が下になります。

○本当は飲まない方がよくなる、とへんなくすりを渡されている

たぶんそう言われなくても「へんなくすり」とは感じていて、その「わかりながらそうしている」ようなことがとても好きなので。「実は共犯」みたいなのはすごくかわいい。これだと渡されてる図を描けばいいだけだから簡単だなともおもいました（すみません……）。

いや、本当にこちらこそすみませんで

した！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

！！！！！！

店たたみます。

マスター 恋をしている

【編集後記】

スーパーで千円使うともらえるシールをあつめて、調理バサミをちょっと安く買った。まだ使っていない。「ご使用前に食器用洗剤で洗ってください」の注意書きを半分だけ守って(洗剤使わないで洗った)、拭いて、片付けてある。何を切ろうかなと考えている。何を切ろうかなって考えること、あんまりない。使用例には「持ち手のところを使ってフタを開けられる」とか「カニの殻を割れる」とかの応用ばかり書いてあって、そこまでいけるならほほなにやってもいいだろうと思う。しかしハサミでカニ割るやつはかなりの乱暴者じゃないだろうか。

何を切ろうかな。薄切り肉。水菜。こんにゃく。ベーコン。のり。ねぎ。マンゴー。そうめん。ああそうめんはやばいな、乾麺を1センチくらいに束ねてざくざくざくってやりたすぎる。快樂のためだけに切って切って切って、めちゃ短いそうめん茹でて、ザルに開けて1割ぐらい隙間から零れて、泣きそうになりながら箸ですすれないからレンゲで掬ってしょっぱいしょっぱい言いながらつゆごと流し込みたい。あとポッキーはどの位置で切ると一番嬉しいのか or 傷つくのか を想像しながら切る、とか。

切る、は大概気持ちいい。カッターのそれと包丁のそれとハサミのそれは違って、調理バサミのそれも別なんだろうと思って、なんだか大事にできそうな気がした。

2016 3/14 迂回

お寺みたいじゃなくてお寺なんだよ 肩の骨がぺんぎんじみて羽ばたいて――

執筆者

スコラブ ([@scope scape](#))
ナイス書 ([@NiceGuuuy](#))
加賀田 優子 ([@0ccak](#))
はだし ([@sunsetsan0](#))
迂回 ([@ukajan](#))
恋をしている ([@vavoikenumai](#))
山中 千瀬 ([@bit 310](#))

なんたる星3月号
発行日:2016年3月14日
編集発行人:迂回
恋をしている
Guest:山中 千瀬
表紙:スコラブ
Twitter:[@nantaruhoshi](#)